

こども詩の学校

上 級



編 集

渋谷清視

那須田稔

渡辺増治

こども詩の学校

上 級

こども詩の学校 上級

こども詩の学校

初版発行／1972年4月©

第11刷／1979年8月発行

編者／渋谷清視(代表)

発行所／株式会社**金の星社**

東京都台東区小島1丁目4-3

電話／東京03-861-1861(代表)

振替／東京0-64678

写植／松竹写植

製版／サンプロセス社

印刷／柳平河工業社

製本／東京美術紙工

911 渋谷清視(代表)

こども詩の学校 上級

金の星社 1979

189P 22cm (こども詩の学校)

基本カード記載例

8392-037031-1406

乱丁落丁本はおとりかえいたしますので、お求めの書店または本社へお申し出願います。

■ この本を読むみなさんへ

詩の心を あなたのものに

この本には、少年少女のための詩のなかから、みなさんに読んでいただきたいと思う作品をえらんでのせました。

『詩の学校』としたのは、あなたが、ひとりで詩を読んだり、詩を書いたりするときの手助けになればという考えからです。作品のあとにつけた『鑑賞かんしょうのために』とあわせ読んで、詩の世界を十分に味わってください。あなたは、詩の世界のすばらしさにひきつけられることでしょう。

詩は、心のかざりのために書くのではなく、生きていく力として書くものだといわれるとき、あなたは何を、どう書くか、この本のなかからつかみとってください。『あなたも詩が書ける』は、その参考になるでしょう。

■もくじ

春の詩

花ふぶき（阪本越郎） 10

■詩話Ⅱのどかな春の風景 12

野のまつり（新川和江） 14

■詩話Ⅱ自然のなかにうたうあかるくたのしいいのちの歌 16

菜畑（野長瀬正夫） 18

■詩話Ⅱ姉を思うやさしい心 20

蔵王の山に（佐藤さち子） 22

■詩話Ⅱ山と深いつながりをもつ者の目や心になって 24

春の歌（草野心平） 26

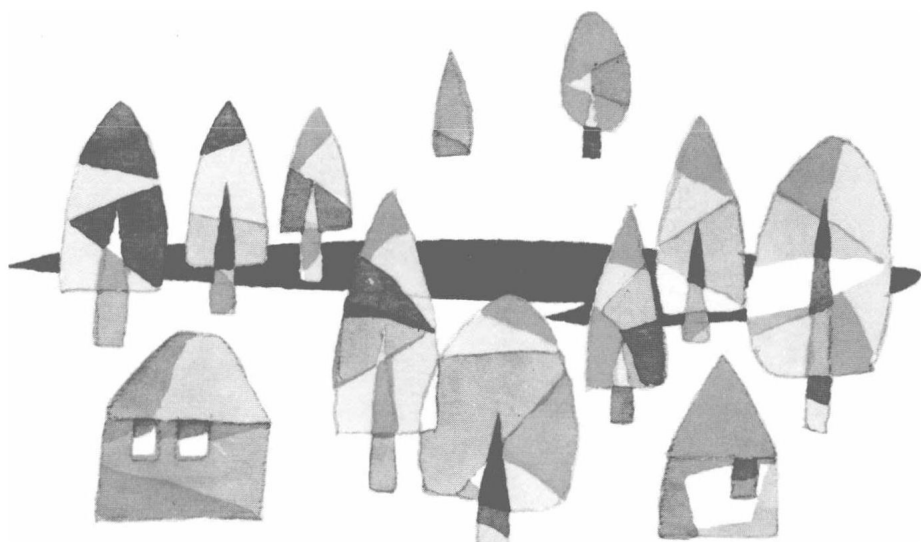
■詩話Ⅱ春をよろこぶ、うきうきとしたひびき 28

春の詩の作者紹介 30

夏の詩

水の中の世界（吉田瑞穂） 32

■詩話Ⅱ「苦しい」けど「美しい」水の中の世界 34



雑 草（北川冬彦） 36

■詩話Ⅱいのちの強さ、ゆたかさに、暖かい励ましを 38

山から降りて来た人（原田直友） 40

■詩話Ⅱ山のようにどっしりと、男らしい詩 42

海（阪本越郎） 44

■詩話Ⅱ別れがたい海との、心のつながり 46

ひろしまの庭（那須田稔） 48

■詩話Ⅱたちあがる広島の心 50

夏の詩の作者紹介 52

あなたも詩が書ける……… 53

■あなたも詩が書けるⅠ

感動は、詩のいのち 54

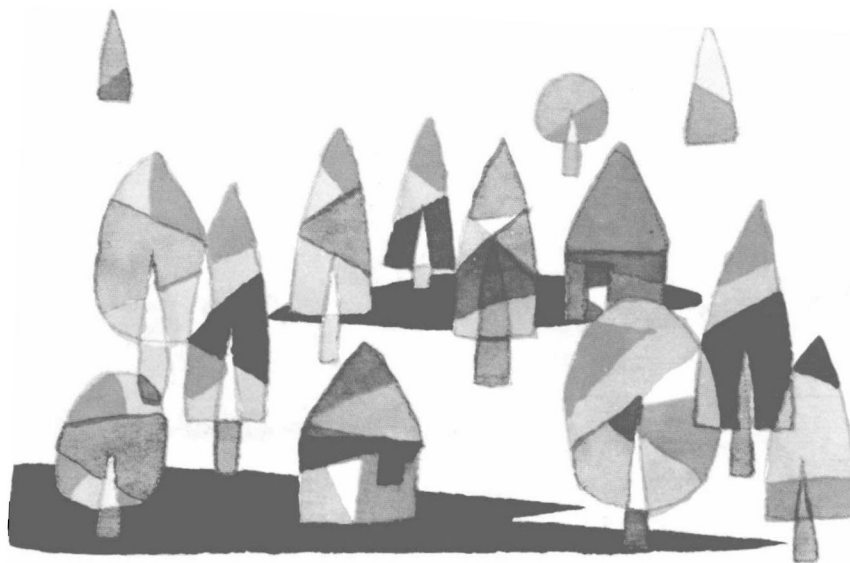
■あなたも詩が書けるⅡ

いま、そこにいあわすように書く 70

■あなたも詩が書けるⅢ

想像力によって生活や社会のことを考える 86

■あなたも詩が書けるⅣ



ことばの力をあなたのものに 106

秋の詩…………… 123

秋のこえ（巽 聖歌） 124

■詩話Ⅱききょういろの空に 秋の気配を感じとる 126

イナゴ（まど・みちお） 128

■詩話Ⅱいのちをまもうとする はりつめた姿 130

北見の海岸（中野重治） 132

■詩話Ⅱ恵まれない人への、あたたかいたわり 134

茂作じいさん（小林純一） 136

■詩話Ⅱ年老いた漁夫の、海（漁）へ寄せるつきない思い 138

みみず（大関松三郎） 140

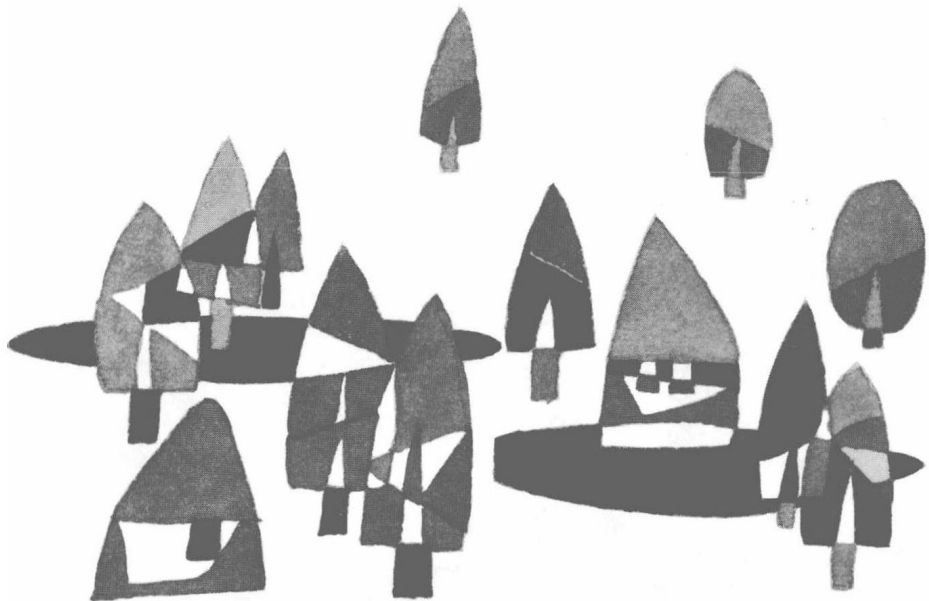
■詩話Ⅱみみずの姿にみる、自分をふくめた百姓のすがた

秋の詩の作者紹介 144

冬の詩…………… 145

冬の夜道（津村信夫） 146

■詩話Ⅱひっそりと 心をよせあえるもの 148



ガス工場の構内で（那須田 稔） 150

■詩話Ⅱ明るく、強く、からっとした味わいの労働詩 152

もえあがれ雪たち（阪田寛夫） 154

■詩話Ⅱ大きな自然への力強い呼びかけ 156

にれの町（百田宗治） 158

■詩話Ⅱ新しい発展と、自然とのつながりの姿に目を向けてみよう

だまっている心と心（坂本遼） 166

■詩話Ⅱせつない母への思い 168

冬の詩の作者紹介 170

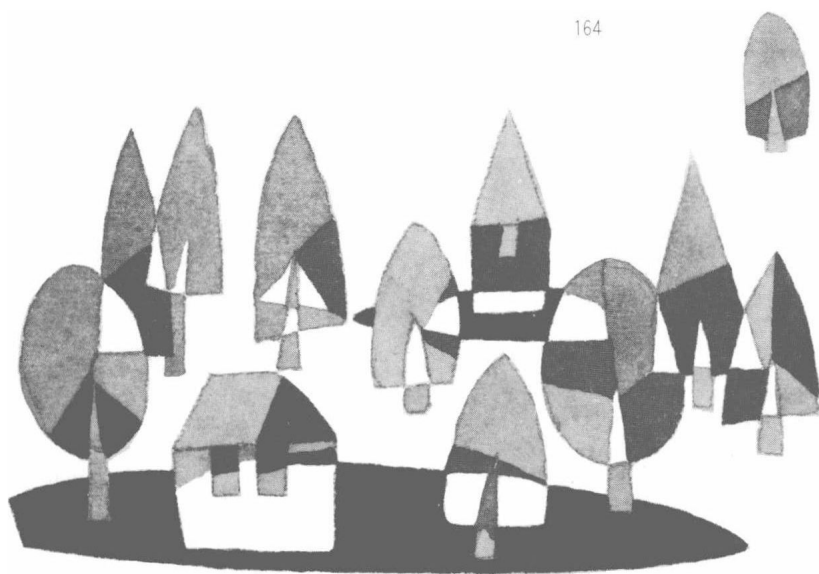
こどもの生活と詩…………… 171

学級詩集づくり 172

執筆者紹介 6

解説（那須田 稔） 180

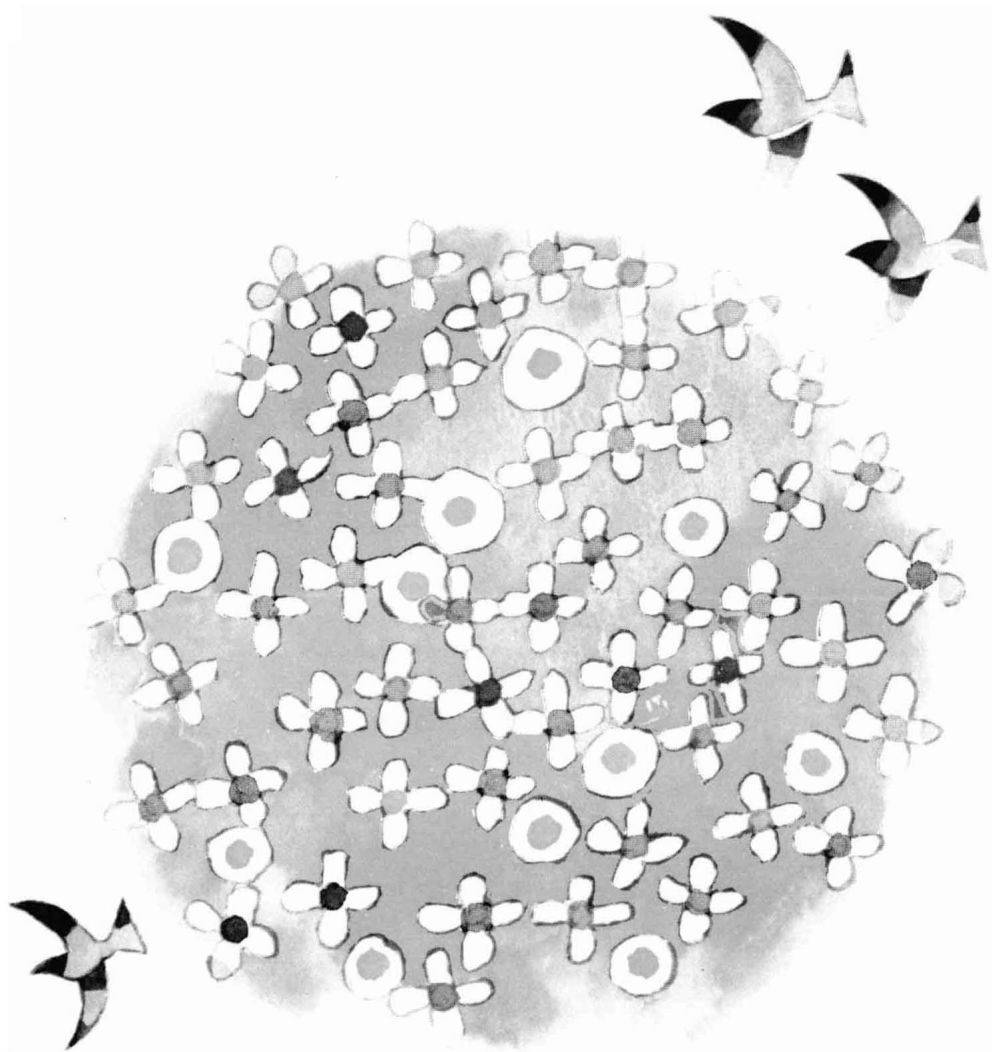
出典の一覧 189



執筆者／佐藤謙助／渡辺増治／清水達也／田川嘉子／安藤操／深美和夫
松崎公男／那須田稔（執筆順）

こども詩の学校

上 級



編集 渋谷清視 那須田 稔 渡辺増治

春の詩



花ふぶき

阪本越郎さかもとえつろう

さくらの花の散る下に

小さな屋根の駅がある。

白い花びらは散りかかり

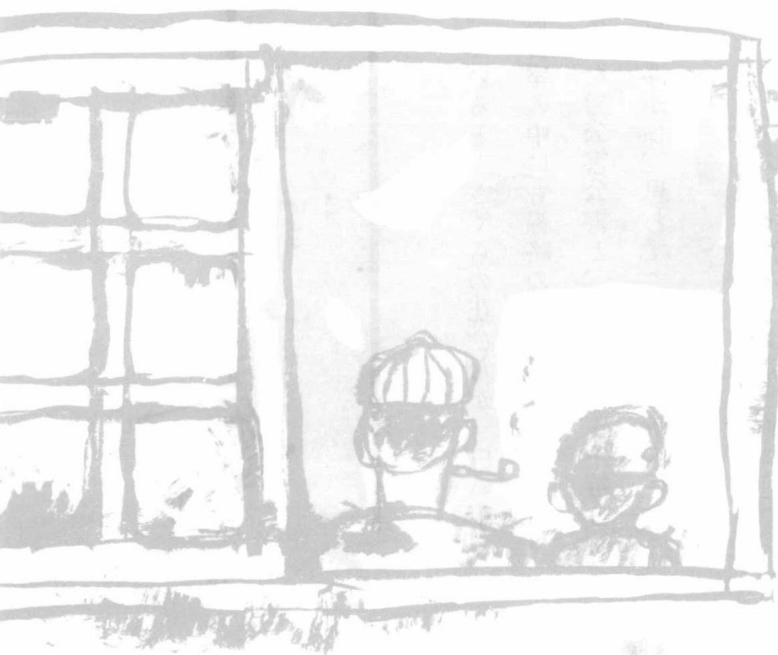
停車場の中は

花びらで いっぱい。

花びらは 男の子の帽子ぼうしにも

せおつた荷物の上にも来てとまる。

この村のさくらの花びらをつけたまま
遠くの町へ行く子もあるんだな。
待合室のベンチの上にも、
白い花びらは散りかかり、
旅人は、花びらの上にこしかけて
春の山脈をながめている。



のどかな春の風景

ひっそりとしたいなかの小さな駅で、ゆっくり汽車を待っていると、さくらの花びらが、白い小人のように次から次と舞^まってくる。それは、駅の屋根にも待合室の中にも線路の上にも、ふぶきのようにつづいて、あたり一面をやわらかくうずめてしまいました。公害公害と、日本じゅうが毎日のようにさわがれているだけに、ひっそりと美しい情景^{じやうけい}が目^めに浮かび、思わずこのような所へ行つてみたいなあ、という気になつてきます。

作者は白い花びらをとおして、駅の屋根・停車場の中・男の子・ベンチ・旅人・山脈^{さんみやく}と順に追っています。とりたてて、むずかしいことばを使ったり、書きかたをしていません。しかし、三行目と十一行目の「白い花びらは散りかかり」とか、五行目の「花びらでいっぱい」や、六行目の「花びらは、男の子の帽子^{ぼうし}にも」などの、はのところに気をつけてみましょう。ふだんわたしたちがものを書くときは、こういう書きかたでなく、「花びらが」とするのがふつうだと思います。



「花びらは」と「花びらが」のちがいはなんてたいしたことではない、と思いがちですが、ほんとうにそうでしょうか。「花びらは」ということで、作者はいかにそれに対して心を動かされているかが伝わってきますか。

はじめにこの詩は、ひっそりと美しい、いなかの情景だといいました。やはりそうです。まったく静かで落ち着いていた、いなかの春の一コマです。でも読んだあとで心に残るのは、ただそのような美しさだけでしょうか。新しい帽子をきちんとかぶり、大きなふろしき包みでも背負った少年が、緊張しながら、この花びらといっしょに遠くの町へ行こうとしています。どこからか来た旅人も、春がすみにけむる山をながめながら、ゆっくり汽車を待っています。やがて、このふたりもここを去り、あとには白い花びらだけが残ることになるでしょう。そうしますとこの詩から、美しい情景とともに、もつとべつな感情もわいてきませんか。もう一回読んでみましょう。

作者の阪本越郎さんは一九〇六年福井市に生まれ、たくさんの詩集や詩の本を書いたり、お茶の水女子大学で教えたりしましたが、一九七〇年になくなりました。この『花ふぶき』は教科書（日書四上・東書五上）に載っており、このほかにもたくさんの有名な詩があります。

（佐藤謙助）

野のまつり

新川和江

空色のスカートをはいた少女たちが
ひろい野原でステップをふむ
するとその足もとから
ぐん！

と芽を出す春の草
おさががぷらんぷらんゆれるたびに
そのさきから

うまれてとび立つ春のちょう

